様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年　５月　１７日現在

研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2006　～　2009
課題番号：18560624
研究課題名（和文）　アール･デコの建築の世界的な波及状況に関する研究

研究課題名（英文）　A study on worldwide spreading phase of Art Deco architecture

研究代表者
吉田　鋼市（　YOSHIDA KOICHI　）
国立大学法人横浜国立大学・大学院工学研究院・教授
研究者番号：60111704

研究成果の概要（和文）：アール・デコの建物が世界中に見られることを、オーストラリアとニュージーランド、カナダ、モロッコとチュニジア、インドを調査して確認した。アール・デコは普遍的な近代的技術の所産のゆえに用いられたのではあるけれども、また旧英連邦であったり、旧植民地であった国々においては、自らのアイデンティティと文化的な自立を表現するための手段としても用いられたことを認識した。

研究成果の概要（英文）：We have learned through surveying the countries of Australia, New Zealand, Canada, Morocco, Tunisia and India that the Art Deco architecture has been spread all over the world. Art Deco architecture was used first of all because of its background of universal technologies, but also it was adopted as an expression of self-identity and cultural independence from colonial situations .

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年度	900,000	0	900,000
２００７年度	800,000	240,000	1,040,000
２００８年度	900,000	270,000	1,170,000
２００９年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総　計	3,100,000	660,000	3,760,000

研究分野：工学
科研費の分科・細目：建築学　・　建築史・意匠
キーワード：建築史・意匠、近代建築、アール・デコ

１．研究開始当初の背景

研究代表者は、これまでフランスと南北アメリカと東アジア・東南アジアの各地でアール・デコの建物を調査してきた。アール・デコは、土地に依存しないモダンな造形と、その背景となる鉄筋コンクリートという近代

技術の故に普及しているが、各地のアール・デコは決して一律ではない。もちろん、基本的なスタイルは共通しているが、各地で独特の土地の造形が取り入れられていることがわかった。そこで、オーストラリアやニュージーランド、あるいは北アフリカなど、これまで調べてこなかった地域でのアール・デコの普及状況とその実際の造形表現とを調査することにした。アール・デコがそれぞれの土地のアイデンティティの表現としても用いられていることを示すためである。

２．研究の目的

アール･デコの建築は、鉄筋コンクリートという２０世紀に普及するようになった新しい材料と、その表面を飾る幾何学的な装飾とを組み合わせた近代を代表する建築様式の一つであり、１９２０－３０年代の世界中に速やかに広まった。その波及力は非常に強く、いわゆるインターナショナル・スタイルに先駆けてインターナショナルになった最初のスタイルとも目されるものである。研究代表者は、これまでいくつかの国でアール･デコ建築の普及状況を見てきた。しかし、南アフリカ共和国のケープタウンとヨハネスブルグにはアール･デコの豊富な実例のあることが知られており、北アフリカのいくつかの都市や、オーストラリア・ニュージーランドの主たる都市にも興味深いアール･デコ建築の存在が報告されている。また、本来の中心であるべきヨーロッパについては、アール･デコの一種と見られるチェコのキュビスムの建築については調査を行ったが、フランス以外のヨーロッパの諸都市については未調査である。これまでの蓄積に上述の諸都市の実例の調査を加えて、アール･デコ建築の世界的な普及状況を把握し、グローバルなアール･デコ建築の研究を完成させたいと考えている。

もう一つの目的は、アール・デコが第一次世界大戦と第二次世界大戦の間のいわゆる両大戦間期の不安な時代にあって、各国のアイデンティティを高揚するために用いられたことに気がついたことで、それをさらに各地で確かめることを考えたことである。アール・デコは、旧植民地では植民国からの文化的独立の表現の手段として、英連邦諸国では英国からの相対的な自立性の表現としても用いられた。各地のアール・デコに挿入されている土着の造形的細部がその例であるが、それは、英語やフランス語やスペイン語などの支配語と土地の言語が混ざり合ってできるクレオール語もしくはピジン語のようなものであろうか。あるいはまた、その波及の様相は、ヨーロッパの諸言語にラテン語が導入されたり、東アジアの諸国に中国語が導入されたりしたのと同様なものであろうか。それらはたしかに似てはいるが、アール・デコにおいてはラテン語、中国語、支配語に相当する中心的なものがない。またそれは、高いところから低いところへと垂直的に流れるものでもない。それは、需要に応じて自然に、そして水平方向に流通した。そうした目論みをもって、土地の造形を挿入したアール・デコの例をできるだけたくさん収集したいと考えている。

３．研究の方法

夏季休暇期間等を利用して、海外および国内における現地調査に赴く。既刊の資料を利用してあらかじめの情報を得る努力をするが、いまのところぴったりとした資料はない模様であり、したがって実際に現地を歩くことでできるだけ知見を得るように努めたい。またこの研究に関する最新の資料の充実を計りたい。

４．研究成果

平成１８年度はオーストラリアのシドニーとメルボルンとキャンベラの３都市とニュージーランドのウェリントンとオークランドとネイピアの３都市を中心に現地調査を行った。またロンドンとベルリンについてもこれまでのフランスを中心としたヨーロッパにおける調査の補足調査を行った。

オーストラリアとニュージーランドは、連合軍（ＡＮＺＡＣ）をつくって第一次世界大戦に参戦するが多くの戦死者を出した。直接の土地とは関わらない遠い場所での無意味とも思える大量の死によってナショナリティが高まり、英連邦からの相対的な自立が始まったとされる。その後の都市計画は、このＡＮＺＡＣの戦死者慰霊碑を中心に進められることになる。たとえば、キャンベラの都市計画は、戦死者慰霊碑と国会議事堂を結ぶ線を軸として行われている。その慰霊碑がアール・デコのスタイルで建てられたから、どの都市にもアール・デコの遺構がかなり存在する。オーストラリアとニュージーランドへのアール・デコの導入は米国を経由して行われたことが多いが、それは英国の全き影響下からの離脱の試みでもあった。

同時にアボリジニやマオリの土着のデザインがしばしば使われており、アール・デコがこの両国のナショナル・アイデンティティの形成の表現を担ったことを思わせる。

特筆すべきはネイピアで、この都市は 1931 年の大震災の後 2 年ほどで一気に復興されており、その時に用いられたスタイルがアール・デコであった。実際、ネイピアの中心部の建物はほとんどすべてアール・デコである。これはさしたるデザイン統制がない中で起

こった現象であり、そこにも英国から米国への中心の移動が考えられるであろう。いずれにしても、当時のアール・デコの波及の強さがよくわかる。

また、ロンドンの再開発は、1930 年代のアール・デコ期の産業遺産の再活用といった側面もあり、ここでもアール・デコの存在の強さが確かめられるのである。

平成 19 年度は、モロッコのカサブランカとラバト、チュニジアのチュニスの３都市を中心に現地調査を行った。また、スペインの３都市、マドリッドとバルセロナとビルバオについてもこれまでのフランスを中心としたヨーロッパにおける調査の補足調査を行った。また、国内では中国銀行倉敷本町支店、倉敷中央病院等、日本におけるアール・デコ建築の実践者としてパイオニア的な働きをした薬師寺主計の最初期作品の現地調査を行った。

平成 19 年度の課題は、イスラム圏の都市にもアール・デコが普及していることを確認することと、その造形がイスラム圏特有の特色を示しているかどうかを見ることであったが、やはり、モロッコとチュニジアの３都市にも、アール･デコの建築がかなり存在する。それは、両国が 1920-30 年代の大戦間期にフランスの保護領下にあったことが直接の理由であろうが、モロッコの２都市のほうがチュニスよりもアール・デコが多い。特筆すべきはカサブランカで、この都市の中心部はさながらアール・デコの伝統的建造物群保存地区の観を呈する。それらの建築の設計に関わったのはほとんどエコール・デ・ボザールの出身者であり、1912 年のモロッコのフランス保護領化以降、今日までカサブランカではボザール出身の建築家が活動している。保護領化当初は、クラシックを基本とし、それにイスラムの伝統的な意匠を組み合わせたものが多かったが、1920 年代半ばからであろうか、アール･デコに変わっていく。そして、アール・デコの造形の中にイスラムの伝統的な造形が巧みに組み込まれていくのである。そうしたイスラムの造形を取り込んだアール・デコの建物が、この都市の主たる構成要素となっている。

なお、スペインにはアール・デコの建物がそれほど多くはない。1920-30 年代のスペインは、それほど建設活動が盛んでなかったためと思われる。バルセロナにはいくつか見られるが、マドリッドはアール･デコが少ない。

平成 20 年度は、カナダのモントリオール、ケベック、トロント、オタワの現地調査を行った。このどの都市にもアール・デコの建築がかなり見られた。フランス語圏のケベック州にあるモントリオールとケベックを、トロントとオタワに比較すると、アール・デコの建築は必ずしもケベック州に多いわけではない。大規模なアール・デコの建物はむしろトロントに多い。これは、1920ー30 年代にその都市がどの程度活発な経済活動と建設活動を行っていたかを物語るものであろう。モントリオールのアール・デコを設計した建築家の経歴を調査したが、彼らの多くが米国出身であったり、米国で教育を受けた人であることがわかった。カナダの建築家にもフランスに留学した人が多いが、カナダのアール・デコは彼らによって導入されたのではなく、米国経由で導入された傾向が強い。カエデやオークや松などカナダの自然を取り入れた装飾を積極的に用いているのも彼らである。モントリオールにはアール・デコ・ソサイアティがあり、活発な活動を実施しているが、その会長の Sandra Cohen-Rose 氏に会ってモントリオールのアール・デコ建築の現存状況を聞いた。モントリオールの近代建築家を代表すると見られる Ernest Cormier(1885-1980)のアール・デコの二つの作品、モントリオール大学と自邸を調査した。また、彼の代表作であるオタワの最高裁判所を調査したが、最高裁判所はアール・デコというよりも歴史的・伝統的フランス調である。Cormier は長期間フランスに留学しているが、むしろアール・デコではなく、フランスの古典的な伝統を受け継いでいるものと思われる。

平成 21 年度は、主としてインドにおけるアール・デコ建築の普及状況について調査した。調査した都市は、ムンバイとデリーとジョードプルであるが、デリーにはアール・デコ建築はほとんど見られない。デリーではエドウィン・ラチェンスをはじめとする英国人建築家の支配力が強く、彼らはヒンズーおよびイスラムのインド的伝統と、英国風のクラシックの融合に邁進したからであろう。

それに対して、ムンバイにはアール・デコの建築が多い。ムンバイにはいちはやく建築の高等教育機関が置かれ、そこから育ったインド人建築家たちが新しい表現を求めた。アール・デコの建築は、主としてインド人建築家たちによって用いられた傾向が強い。英国ではない普遍的な近代的表現としてアール・デコがとらえられたのであろう。彼らはまた、アール・デコにインドの伝統的な造形表現をもりこんだ。New India Assurance building がその例である。ムンバイにおけるアール・デコは、英国からの独立運動、インドの自立運動の建築的表現としても考えられる。

ジョードプルには、そのインテリアが典型的なアール・デコのウマイド・バワン（1942

年）というマハーラージャの築いた宮殿がある。建物そのものの設計は、英国人建築家のHenry Vaughan Lanchester（1863-1953）であり、その外観はヒンズーとインド・イスラムの意匠を加味したクラシックであるが、内部はアール・デコで統一されており、インドのアール・デコ建築の代表と見られるものである。そのインテリアのデザインはおもにポーランド人画家のStefan Norblin(1892-1952)の設計によるものであった。英国人の設計したインドの建物にポーランド人の設計したアール・デコのインテリアが見られるということにも、アール・デコの国際性がうかがわれるのである。

以上の調査対象となった諸都市には、波及の強弱の程度の差はあっても、いずれもアール・デコの建築の存在が確認され、アール・デコの世界的な波及の実態が確かめられた。特に、ニュージーランドのネイピアは街全体がアール・デコの建築でつくられており、規模の大きさは別にして、米国のマイアミビーチとよく似た興味深い都市であった。また、モロッコのカサブランカの一画もアール・デコの建物が集中的に見られる。

アール・デコは各地の自然や伝統的な文化をモチーフにした造形要素を積極的に用いており、インターナショナル・スタイルの考えとは異なる地域主義的な思想を示している。インターナショナル・スタイルが一種の思想とともに受け取られたのに対して、アール・デコはナショナル・アイデンティティの表現以外のイデオロギー的な側面が少なく、むしろ鉄筋コンクリートというすぐれた技術としてまず受け入れられたことによるものであろう。そして、どこでも導入可能なすぐれた技術の表面に、地元のアイデンティティを表現する造形が付け加えられたのであろう。鉄筋コンクリートという技術はそれを可能にしたし、施工技術の普及が世界各地でそれを可能にした。

1920-30 年代はいわゆる大戦間期であり、ヨーロッパのみならず世界各国も自らのよって立つ政治的・文化的基盤の表明を要求されていた。そうした背景の上に、アール・デコは速やかに普及したのであるが、アール・デコはそうした各地の要求に技術と意匠の両面で応えたのである。世界の各地で、時代の背景とアール・デコの造形的細部の表現との一致を確かめ得たと考える。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

①「吉田鋼市、「ムンバイのアール・デコ建築におけるインド的意匠」、平成 22 年度日本建築学会大会学術講演梗概集、Ｆ2、2010 年、印刷中、査読無

② 吉田鋼市、「E. コルミエとモントリオール（カナダ）のアール・デコ建築」、平成 21 年度日本建築学会大会学術講演梗概集、Ｆ2、2009 年、pp.139-140、査読無

③ 吉田鋼市、「カサブランカ（モロッコ）のアール・デコ建築」、平成 20 年度日本建築学会大会学術講演梗概集、Ｆ2、2008 年、pp.561-562、査読無

④ 吉田鋼市、「ネイピア（ニュージーランド）のアール・デコ建築」、平成 19 年度日本建築学会大会学術講演梗概集、Ｆ2、2007 年、pp.273-274、査読無

〔図書〕（計１件）

① 吉田鋼市、「アール・デコ――目と手の愉悦」(『アール・デコの建築』NHK 出版、2008 年、pp.58-65 所収)

６．研究組織

(1)研究代表者

吉田　鋼市　（YOSHIDA KOICHI）

国立大学法人横浜国立大学・大学院工学研究院・教授

研究者番号：60111704